

小学校体育における子どもの能力の差への指導 —スポーツ少年団の指導者に対するインタビューをもとに—

Guidance on Children's Abilities in Elementary School Physical Education Based on Interviews with Sports Youth Organization Leaders

(2018年3月31日受理)

小阪 芙由美 國田 祥子 平松美由紀 森田 健治*
Fuyumi Kosaka Shoko Kunita Miyuki Hiramatsu Kenji Morita

Key words : 小学生, スポーツ少年団, 体育, 能力差

要 約

子どもの運動習慣の2極化により,子どもの運動能力に大きな差が生じていると考えられる。本研究では,小学校体育において,子どもの能力差に対応するために何が必要であるかを検討するため,スポーツ少年団の指導者を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象者は,岡山県のスポーツ少年団の指導者4名であった。子どもの能力差に対してどのような指導を行っているのか尋ね,ICレコーダーで録音した。回答は逐語記録として書き起こし,KJ法を用いて整理した。その結果,スポーツ少年団の指導者は小学校と同様か,もしくはそれ以上に,体力や技術に大きな差がある子ども達を対象とした指導を日常的に行っていることが明らかとなった。指導としては全体に対する指導と差に応じた指導をともに行っており,差に応じた指導の必要性の高さが示された。しかしその必要性に反して,指導者不足により差に応じた指導が困難な状況であることも明らかとなった。これらの結果から,小学校の体育指導においても同様に,差に応じた指導が必要であること,また差に応じた指導を十分に行うためには,補助教員の数を確保することや専門性の高い教員の配置が有効であることが示唆された。

問題と目的

スポーツ庁が2017年に行った子どもの「体力・運動能力,運動習慣等調査」によると,調査をはじめた平成20年以降の子どもの体力は,男子は横ばい傾向,女子は向上傾向であると報告されている(スポーツ庁,2018)。しかし,体力テストで最も高い水準を示した昭和60年度の調査結果との比較を見ると,反復横跳び以外の項目で約半数以上がその平均値を下回っており,子どもの体力低下はいまだに大きな問題であると言えるだろう。子どもの体力低下の原因について,文部科学省の中央教育審議会は,国民の意識の変化,子どもを取り巻く環境の問題,子どもの生活習慣の問題の3つをあげている(文部科学省,2002)。中でも「子どもを取り巻く環境の問題」と

して「スポーツや外遊びに不可欠な時間,空間,仲間の3つの減少が考えられる」と述べられおり,社会の変化に伴う生活環境の変化が,子どもの体力低下の原因の1つと言えるだろう。生活が便利になったことで,日常的に体を動かす機会が減少すると同時に,子どもが外で思い切り体を動かして遊べる環境が減少したことで運動を行わない子どもが増え,体力の低下につながっているのではないだろうか。

しかし一方で,近年は総合型地域スポーツクラブの発展により,多種多様なスポーツが広がりを見せ,初心者からトップクラスまで様々なカテゴリーで子どもが運動できる環境づくりが進んでいる。また,スポーツ少年団に所属する小学生は減少傾向にはあるものの,2014年時点で741,797人と決して少なくはない(公益財団法人日本

*倉敷市立長尾小学校教諭

体育協会日本スポーツ少年団・公益財団法人笹川スポーツ財団, 2016)。このことは、運動習慣が少ない子どもが増加している一方で、運動をする子どもも一定数いることを示していると言えるだろう。文部科学省は、子どもに対して体育の授業以外の時間に運動をするよう呼びかけたり、休み時間に運動やスポーツをする時間を設定したりするなど、子どもたちが運動やスポーツを習慣化させるための取り組みをした学校の児童は、そうした取り組みをしなかった学校の児童に比べて体力が高かったことも報告している(文部科学省, 2012)。このことから、子どもの体力と運動習慣の間には関係性があり、ほぼ毎日運動を行っている子どもとそうでない子どもでは、体力や運動能力に大きな差が出来ると考えられる。

このような現状から、小学校には極端に運動習慣の異なる子どもが在籍しており、体力や技術などさまざまな差が生じていることが予測される。しかし、体育指導において、体力や技術に差がある子どもが同じ学習を行うことは、非常に困難だろう。たとえば、体力の高い子どもに合わせた学習を行うと、体力の低い子どもにとっては過酷なものとなり「体育嫌いの子ども」になりかねない。逆に、体力の低い子どもに合わせた学習内容で授業を行うと、体力の高い子どもにとってはやりがいを感じないものになるのではないだろうか。

そのため、差のある複数の子どもたちを対象に指導を行うためには、様々な技術や工夫が必要と考えられる。まず、子どもの体力や技能を見極めなくてはならない。その上で、子どもが何につまずき、どのような課題を持っているのかを知る必要がある。更に、それらを解決し、目標を達成できるように働きかけなければならないのである。これらを成し遂げるのは、決して容易なことではないだろう。

ではこうした現状において、小学校ではどのような取り組みが必要とされているのだろうか。この問題について検討するにあたり、本研究ではスポーツ少年団の指導者を対象にインタビュー調査を行い、子どもの能力の差に対してどのように指導しているのかを調べることにする。

小学校教員ではなく、スポーツ少年団の指導者を対象とするのは、小学校で体育を指導する小学校教員のほとんどが、初等教育の専門家ではあっても、体育指導の専

門家ではないためである。より有効な工夫や取り組みについては、日頃から運動指導を行っている地域のスポーツ少年団やクラブチームの指導者の方がより詳しいのではないだろうか。スポーツ少年団の指導者の多くは、それぞれの競技特性や運動指導について専門的な知識を持ち、多くの経験をしていると想定される、いわば運動指導の専門家である。では、その専門家たちは、体力や技術に差のある子どもたちに対して、どのような工夫をし、指導しているのだろうか。このことを調べることで、小学校での体育指導に必要な取り組みについて検討することを、本研究の目的とする。

方 法

1. 調査対象者

岡山県のスポーツ少年団の指導者4名(K市スポーツ少年団3名, S市スポーツ少年団1名, うち監督2名, コーチ2名)であった。

2. 調査期間

インタビューは、2013年10月から2014年1月に行った。

3. 質問項目

スポーツ少年団の指導者が、子どもの能力の差に対してどのような指導を行っているのかを調査するため「子どもたちが運動能力に違いがある場合すべての子どもに同じ経験をさせるか、個々の運動能力の特性に応じて経験や活動をさせるかどちらを重視させますか」という質問を行った。この他にも7項目、全8項目の質問を行ったが、質問の内容が多岐にわたっており、全ての内容を1度に扱うのは困難であることから、本研究では子どもの能力の差への対応について尋ねている上記の1項目に絞って検討を行うこととする。

4. 手続き

調査参加者であるスポーツ少年団の指導者に、電話にてインタビューの依頼をした。承諾して頂けた4名に対して、半構造化インタビューを行った。インタビューは1人につき30～45分程度であり、対象者の承諾を得てICレコーダーで録音した。

結 果

インタビューで得られた回答を逐語記録として書き起こし、KJ法を用いて整理した。逐語記録から「1年生から6年生を指導している」や「体力の差がある」などの計79個の情報ユニットが抽出され、これらの情報ユニットは「1年生から6年生の子どもがいる」や「体力や技術などさまざまな差がある」などの計13個のデータラベルに分類整理された。また、これらのデータラベルは更に「子どもに対する指導について」と「指導者について」という2つのカテゴリーに分類することができた。整理したものを図解化し、Figure1に示した。

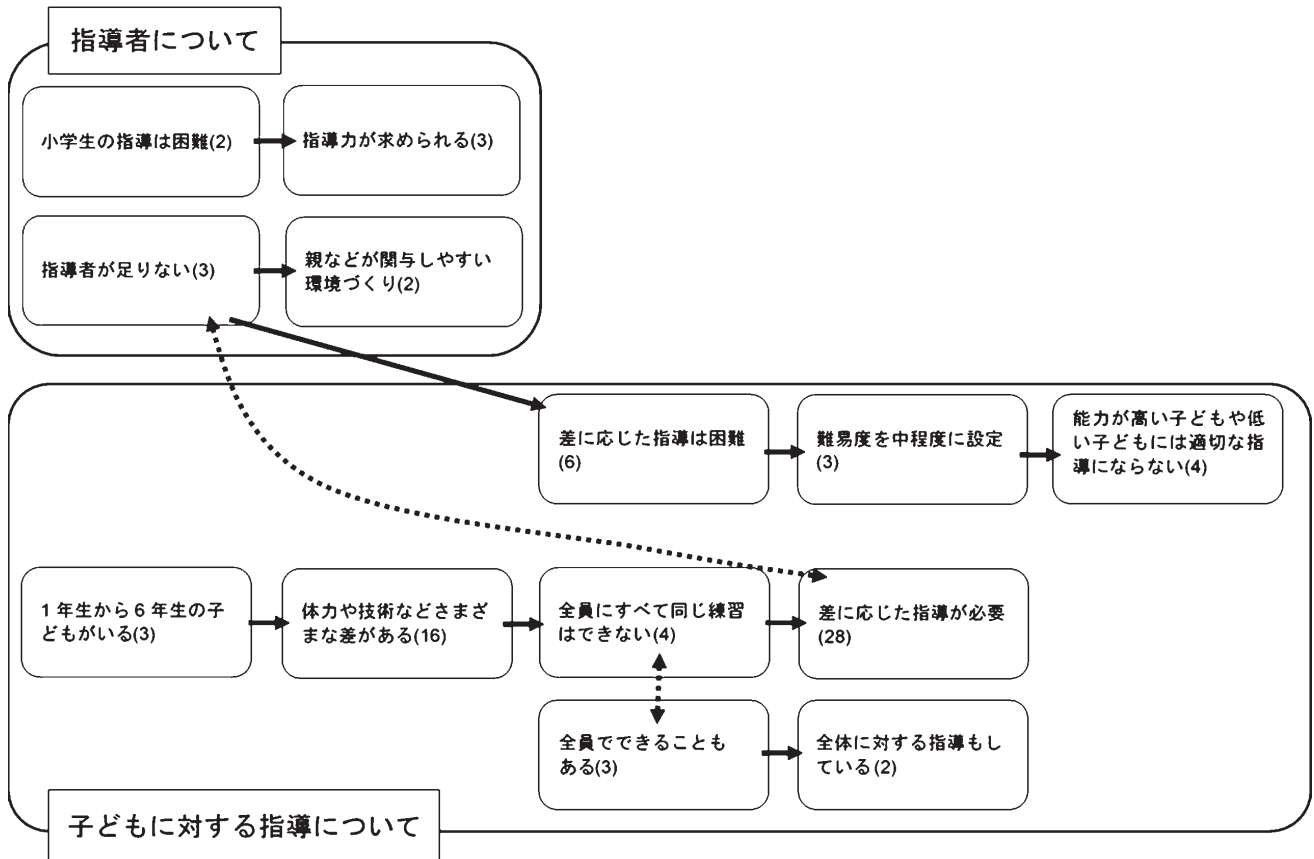
さらに、Figure1にもとづいて以下のように文章化した。

まず「子どもに対する指導について」見てみると、スポーツ少年団には「1年生から6年生の子どもがいる」ため、子どもたちには「体力や技術などさまざまな差があ

る」。そのため、差がある子ども「全員にすべて同じ練習はできない」。しかし、最低限身に付けるべき体の動かし方や、挨拶や返事、道具の管理など、体力面や技術面以外で「全員でできることもある」ため、「全体に対する指導もしている」。だが、やはり差がある子ども全員でできないことも多いため、「差に応じた指導が必要」なことは明白である。

しかし一方で「指導者について」は、「指導者が足りない」という問題がある。親に対する呼びかけなど「親などが関与しやすい環境づくり」を行っているが、指導者が不足しているという現状から、「差に応じた指導は困難」という状況にある。やむを得ず、練習は「難易度を中程度に設定」して行っているが、「能力が高い子どもや低い子どもには適切な指導にならない」という問題は依然として存在している。

加えて、「小学生の指導は困難」であることから、指導者には小学生を教えるための「指導力が求められる」。



→ 因果関係

←.....→ 対立関係

※ () 内は情報ユニットの数を示す。

Figure 1. 子どもの能力の差に対する指導

考 察

本研究は、日頃から運動指導を行っているスポーツ少年団の指導者を対象に、子どもの能力の差に対してどのように指導しているのかインタビューし、その結果に基づいて小学校での体育指導に必要な取り組みについて検討することを目的として行った。

インタビューの結果をKJ法を用いて整理したところ、〈体力や技術などさまざまな差がある〉というデータラベルに分類された情報ユニットが16とかなり多かったことから、スポーツ少年団に所属する小学生にも、体力や技術に大きな差があることが示された。スポーツ少年団に所属しているのは、比較的運動に親しみのある子どもや、運動の得意な子どもであると考えられる。しかし小学校における体育指導とは異なり、異なる学年の子ども達を同時に指導しなくてはならないことから、スポーツ少年団の指導者は小学校と同様か、もしくはそれ以上に、体力や技術に大きな差がある子ども達を対象とした指導を日常的に行っていることが明らかとなった。さらに、小学校は1年から6年までと学年が多いこと、また同一学年内でもさまざまな差があることから、子どもの能力差に対する指導には工夫が必要なのではないだろうか。このことから、スポーツ少年団における指導の工夫や、そこで見出される課題は、小学校体育においても有用と考えられる。

このことを踏まえて結果を見ていくと、指導には「全体に対する指導」と「差に応じた指導」の2つがあり、この両者をともに行う必要があることが示されている。小学校体育でも、こうした区別は有効なのではないだろうか。たとえば、使用する用具の準備や準備体操、基本動作の練習など、授業の導入の部分で全体に対する指導を行うと有効だろう。ここでの基本動作とは、後の運動学習に必要な運動感覚を養うことができる運動、マット運動でいえば「ゆりかご」や「背支持倒立」などで、ほかに子ども間のコミュニケーションがとれるようなドリルゲームなどで構成するとよいのではないだろうか。このように、まず子どもの体力や技術に関係なく全員で取り組むことができる内容で構成された全体に対する指導を行い、その後差に応じた指導へと繋げるといった工夫が考えられるだろう。

また「差に応じた指導」では、具体的な運動指導やグループ構成、目標設定など、実際に子どもの体力や技術を見極め、子ども1人ひとりにあった指導を行うことが求められる。小学校には、スポーツ少年団に所属しているような、比較的運動に親しみのある子どもや、運動の得意な子どもがいる一方で、あまり運動に親しみがなく、運動の不得意な子どももいる。もし、子どもの体力や技術を無視した指導を行えば、大きな怪我や事故を引き起こすだけではなく、モチベーションの低下につながり「体育嫌いの子供」をつくりかねない。そうならないためにも、子どもの体力や技術にあった指導を行うことは、子どもが「できた」という経験を積み重ねることにつながり、運動有能感が高まることが期待できるのではないだろうか。差に応じた指導の必要性について言及しているデータラベル〈差に応じた指導が必要〉に分類された情報ユニットは、28と今回のインタビューで最も多くなっていた。このことは、差に応じた指導の必要性の高さを示すものと考えられる。

しかしその必要性に反して、差に応じた指導が必ずしも十分に行われていないことも、インタビューの結果から明らかになった。その原因として、スポーツ少年団の指導者は指導者不足を指摘している。つまり、子どものレベルに合わせて指導を行おうとすると、複数のレベルにそれぞれ最低1人は指導者が必要となるが、そうした潤沢な指導者を要するスポーツ少年団は少ないということだろう。そのため、練習の難易度を中程度に設定して指導するしかないが、それではレベルの高い子どもや低い子どもにとって適切な指導とはならないといった問題があることが示されていた。

これは、小学校体育においても同様のことが言えるだろう。差に応じた指導を十分に行うためには、まず体育指導における教員の数を増やすことが必要であると考えられる。現在、ほとんどの小学校では、1人の教員が1クラスの子供達全員を指導している。体育の指導にあたる教員を増やすことで、1人の教員が対応する子どもの人数も減少し、細部まで行き届いた体育指導が可能になるだろう。ただし、小学校教員のほとんどはスポーツ少年団の指導者とは異なり、運動指導の専門家ではない。そのため、単に人数を増やしただけでは、深い知識に基づいた配慮が必要な、差に応じた指導が可能になるとは

言えないかもしれない。差に応じた指導を十分に行うためには、体育指導についての専門性が高い教員を配置することも考える必要があるだろう。そうした教員を配置することで、子どもたちに対してより適切な指導ができるようになるだけでなく、体育指導を専門としていない教員の指導力向上にもつなげることができると考えられる。

結 論

スポーツ少年団の指導者へのインタビューから、体育指導における子どもの能力差に対して、その差に応じた指導の必要性が明らかになった。また、差に応じた指導を行うためには、指導者の確保が不可欠であることも示された。

これはまた、ほとんどの小学校において、体育指導の専門家ではない教員が1人で1クラス全員の指導を行っている現状では、差に応じた指導が困難であることが示されたとも言えるだろう。差に応じた体育指導を行うためには、補助教員を確保すること、また専門性の高い教員を配置することが必要なのではないだろうか。

また、子どもたちの能力の差にかかわらず、全体に対する指導として行えることがあることも、スポーツ少年団の指導者へのインタビューから明らかとなった。小学校においても、学習の準備、基本動作の習得など、体力や技術に関係なくできることは多くある。スポーツ少年団とは異なり、技術向上にそれほど重点を置かないことも多い小学校体育では、学習の準備などにクラス全体で取り組むこと自体も、また重要な学習の機会である。ともに学ぶ環境を整えていくなかで、子どもたちに協力することの大切さや楽しさを学ばせることも、小学校体育における重要な指導の1つであると言えるだろう。

引 用 文 献

公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団・公益財団法人笹川スポーツ財団(2016). スポーツ少年団現況調査報告書 日本スポーツ少年団登録データの分析(2002年～2014年) 2016年10月 <<http://www.ssf.or.jp/research/report/category4/>

tabid/1093/Default.aspx> (2018年3月27日)

文部科学省(2012). 子どもの体力向上のための取組ハンドブック 運動の日常化のために 文部科学省 2014年7月 <http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1321132.htm> (2018年3月26日)

文部科学省(2002). 子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申案) 文部科学省 2002年9月30日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344516.htm> (2018年3月26日)

スポーツ庁(2018). 平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について スポーツ庁 2018年2月13日 <http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/03/06/1401889_1.pdf> (2018年3月26日)

